アーカイブ新聞　（2015 年 11 月 10 日　第 863 号）

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員　中桐正夫

＊　広瀬アルバム（その 2、写真 16 枚）（東京天文台 100 周年記念誌資料 2-29-2）

アーカイブ新聞第 862 号（2015 年 11 月 10 日）に「広瀬アルバム（その 1、写真 20 枚）（東京天文台 100 周年記念誌資料 2-29-1）」という記事を書き、広瀬アルバムの写真リスト及び 20 枚の写真を紹介した。この号はその続編であるが、写真リスト（表 1）の No.20～29 については、アーカイブ室新聞第 370 号（2010 年 8 月 10 日）に「野辺山太陽電波観測所起工式の写真発見」という記事で紹介済みである。

写真 1

写真 2

写真 1 には、1960 年 3 月 13 日の日付が入っている。天体掃索部の何かの宴会風景であろう写真 2 に広瀬先生と映っている人物は不明である。

写真 3 は彗星捜索望遠鏡である。この望遠鏡はツァイス製で 26 吋、８吋屈折赤道儀望遠鏡、太陽塔望遠鏡などとほぼ同時にドイツから輸入されたものであるが、残された写真はわずかであり、望遠鏡自体の所在も知れない。非常にユニークな形式で椅子に座ったまま全天をサーベイできる機構であった。写真 4 は、26 吋（65 ㎝）望遠鏡焦点部に立つ広瀬・冨田両氏である。太陽像が投影されている珍しい写真である。

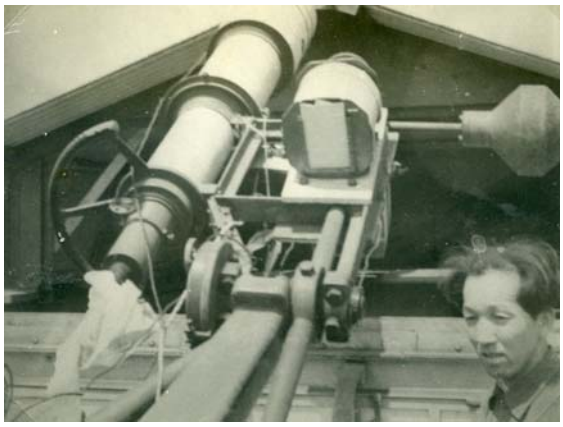

写真 3

写真 4

写真 5

写真 5 は、現在は国立科学博物館に収蔵・展示されている国の重要文化財のイギリス・トロートン・シムス製 20 ㎝屈折赤道儀望遠鏡で、同架されているのはブラッシャー天体写真儀と思われる。接眼鏡をのぞいている人物は不明である。

写真 6

写真 6 の前列右端写っているのは村山定男、後列左端は冨田弘一郎氏と思われる。
前列中央は神田茂氏と古在先生から連絡があった。

写真 7

写真 7 は貴重な写真で、和服姿の人物は射場保昭氏である。京都大学名誉教授竹本修三によれば、この写真は奈良の春日神社第二鳥居の前で、中央がストラトン、右がロイヅ氏とあるが、広瀬メモには写真 8 のように書かれている。

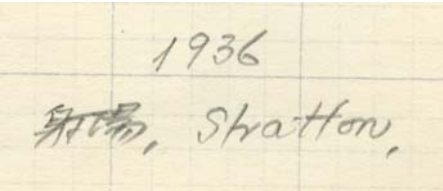

写真 8

この写真に写っている射場保昭氏は、神戸に当時日本有数の望遠鏡を備えた射場観測所を持っており、昭和 20 年 2 月、東京天文台本館焼失を受けて、昭和 21 年に観測所所有の一切を東京天文台に寄贈したのは、この広瀬先生との関係からだったと思われる。

写真 9　　写真 10

写真 9、10 は、ブラッシャー天体写真儀ドーム付近での大きな荷物の様子から、ベーカーナンシュミットカメラ到着時の写真と思われる。写真 10 の中央が広瀬先生、周りはスミソニアンの人たちか？

写真 11

写真 11 は、26 吋望遠鏡ドーム前での記念写真である。ドームはまだ迷彩色に塗られた状態であり、前列に腰かけた右から 2 人目は戦後、1946 年に台長になられた萩原雄祐氏、その右は宮地政司氏である。この写真も貴重なものである。この中で筆者が同定できるのは、畑中武夫、清水一郎、清水いく、藤井繁の各氏くらいである。

写真 12 は、小さな子供、そのお母さんなどたくさんの家族が写っている。広瀬アルバムには、私的な写真はないようであるから、これは東京天文台の行事で職員の家族を伴った親睦慰安旅行のようなものの記念写真ではないかと思われる。

写真 12

写真 13

写真 13 ではっきりわかる人物は右端一番後ろに広瀬先生がいる。高山に登った様子で、たくさんの学生がいるが、この中には高名な天文学者になったのであろうか？

写真 14 は、東京天文台官舎玄関での撮影された奥さんたちの記念写真と思われるが、奥さんしか映っていないので 1 人も同定できる人はいない。セピア色に古びた写真は、今このように次世代へ保存しなければと思う。今までアーカイブの仕事を始めてたくさんの古い写真を見てきたが、官舎前でこれだけのご婦人方が写っている写真を見るのは初めてのことである。

写真 15 は、座っている左端が広瀬先生、その右は服部忠彦氏だと古在さんから伺った。立っている右端が下保さんしか筆者には同定できない。写真 16 は一番後ろが広瀬先生、ほかには同定できる人はいない。

写真 14

写真 15

写真 16

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp